

丹後地域前期古墳の規模・墳形に見る 階層制と副葬品

－丹後地域が畿内政権の支配を受け入れていく過程－

福島 孝行

1. はじめに

弥生時代後期において、丹後・但馬・丹波の三たん地域は、独特な土器と墓制によって非常に地域性の強い社会を形成した。卓上墓と台状墓を首長層の墓制として選択し、山陰と北陸で爆発的に増えた多角形住居をも受け入れなかった。一方で墓上祭祀を中心に西日本地域で共有される墓上祭祀は取り入れ、他地域からの供献土器も受け入れている。こうした状況の背景には朝鮮半島からの鉄器輸入の窓口としての役割を三たん地域が果たしていただろうことが推測されている。そして三たん地域の統合の極限の状況を示すのが赤坂今井墳丘墓であると言えよう。しかしながら畿内地域が庄内式へ移行する頃から三たん地域の栄光は急速に崩壊していく。

今回の検討では以上の歴史の過程を踏まえ、一旦は強大な勢力を持った三たん地域の内、その中心的な役割を果たした丹後地域が、畿内政権が前方後円墳体制を敷衍していく過程で、どのようにそれを受け入れていったのかを墳形・規模・副葬品・供献土器をキーワードに読み解いていく。

2. 研究史

丹後の前期古墳についての研究は数多い。ここでは本論の論旨に関わる部分を紹介しておく。

田中彩太・広瀬和雄らが1973年に発表した『同志社考古』10号記念特集「丹後の古式古墳」では、丹後の前半期古墳について資料集成、測量調査を公表し、広瀬和雄による丹後の古墳編年及び、その特色についての考察が行われている^(注3)。編年観については、丹後国営農地の発掘調査やその後の土師器・埴輪・副葬品の編年研究の深化によって修正すべき点も多いが、丹後地域の古墳の特色として、「単一水系をそれぞれの単位とする古墳の系列」と、単一水系を越えた「丹後を単位とする大規模古墳の系列」が存在したとし、前者は「その地域内部における統一的政治集団もしくは、最大の政治集団が『畿内政治集団』との間に、古墳造営に媒介的に表出される政治関係を成立させ、その関係を連続せしめ」た

とし、後者は「ある一定の期間、特定の政治的役割を『畿内政治集団』より担うべくあるように設定された政治集団の存在を意味する」とした点は卓見と言えよう。

1987年には堤圭三郎による京都府北部の石棺の集成^(注4)、平良泰久の丹波地域の中期古墳に特徴的な方墳の問題に関する覚書^(注5)が発表された。また細川修平は加悦谷に焦点を当てて当該地域の古墳の変遷を述べたが^(注6)、加悦谷における古墳出現期を蛭子山古墳及び温江丸山古墳にしているのは『同志社考古』と同様であり、前者を「大和を中核とする『部族連合体』」との間に一次的な関係を結んだ加悦谷の首長墓とし、後者は前者を媒介に二次的な関係を結んだ温江小地域の首長墓と位置づけたのも、『同志社考古』の枠組みを逸脱するものではなかった。

1990年には1988年に調査された私市丸山古墳に触発されて、京都府の大型円墳集成が行われた^(注7)。この中で、カジヤ古墳を「外形から見た非定形化古墳の様態とは逆に、埋葬施設・副葬品が畿内型とも言うべき内容を持つ」と評価した。また蛭子山古墳と温江丸山古墳には墳丘のみならず、埴輪・埋葬施設・副葬鏡式に違いがあり、単なる階層差ではなく、「拮抗する状況にあった」としている。

1991年杉原和雄は布留式甕の分布と前期古墳の分布を重ね、埴輪・葺石をもつ古墳の出現と布留式甕の分布は重なり、波路古墳・岩滝丸山古墳・大田南古墳など、初期古墳とは一致せず、弥生後期の墳墓との関係性を指摘した^(注8)。これは1973年の「同志社考古」以降定説化していた「丹後の古墳(時代)は蛭子山古墳の出現をもって始まる」という認識への発掘調査成果を背景にした明確な決別の宣言である。しかもこれら「初期古墳」について、これまで否定されてきた弥生墓制との継続性を初めて言及したものである。

1992年11月に行われた「第1回加悦町古墳シンポジウム」^(注9)の席上、杉原和雄は三大古墳の性格について、農業を基盤とした余剰生産物の蓄積と「畿内政治集団」との関係性を古墳の築造の背景と捉えるのではなく、海を背景とした立地の特異性を第1番に挙げ、また広瀬和雄が想定した「特定の政治的役割」について「北陸とか出雲とか特に出雲の方をヤマト政権が押さえておくための関門」である丹後を早く押さえておく必要があった、とした。同年12月に行われた両丹考古学研究会・但馬考古学研究会交流十周年記念大会の席上、細川康晴は蛭子山古墳の地域色を強調し、逆にカジヤ古墳を「楕円形墳」と規定しながらも、埋葬施設・副葬品では畿内との密接な関係を指摘している^(注10)。また蛭子山古墳の石棺は松岳山古墳を介した北河内勢力との関係、丹後型埴輪やカジヤ古墳の石製腕飾類は北摂・北大和との関係など、「畿内地方中枢の一つの限定的な勢力と個別に結びついたものではなく、いくつかの勢力と結びついていたことを指摘した。

1996年の第3回加悦町文化財シンポジウム^(注11)では岸本直文が蛭子山・網野銚子山古墳が陵

山古墳型の築造規格であり、神明山古墳が五社神古墳型であるという指摘を行い、和田晴吾は「前期後半最大型」のいちばん中核にあったのが丹後地域ではなかったかと、三大古墳の出現の経緯を指摘している。また広瀬和雄は三大古墳の出現は大和政権の政治意志の発現であり、外交ルートの確保であるとしている。

1999年、細川康晴は鏡を出土した古墳の検討を行い、5 m刻みの墳丘規模・副葬品ランクモデルと鏡副葬の相関を論じた。^(注12)この中で、小規模墳に副葬される鏡については、古墳群築造の契機になった可能性を指摘し、また鉄鏃との排他的関係を指摘している。

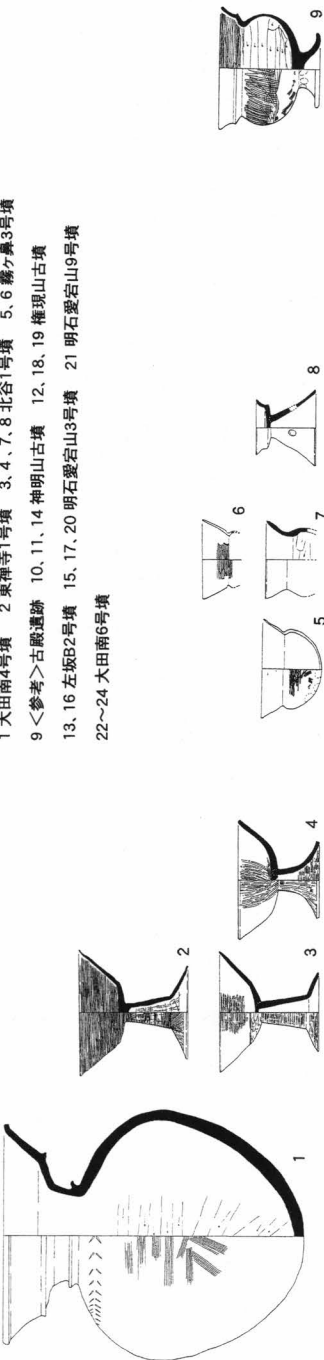
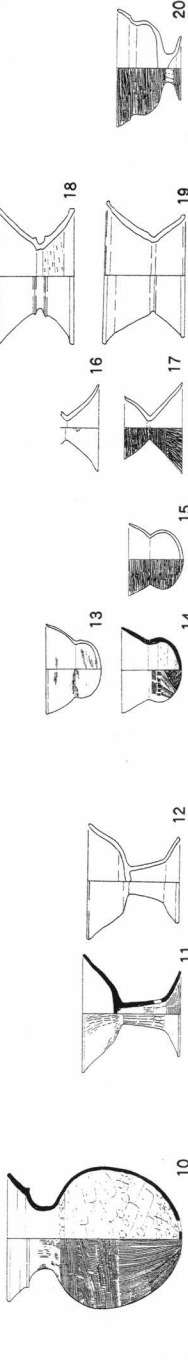
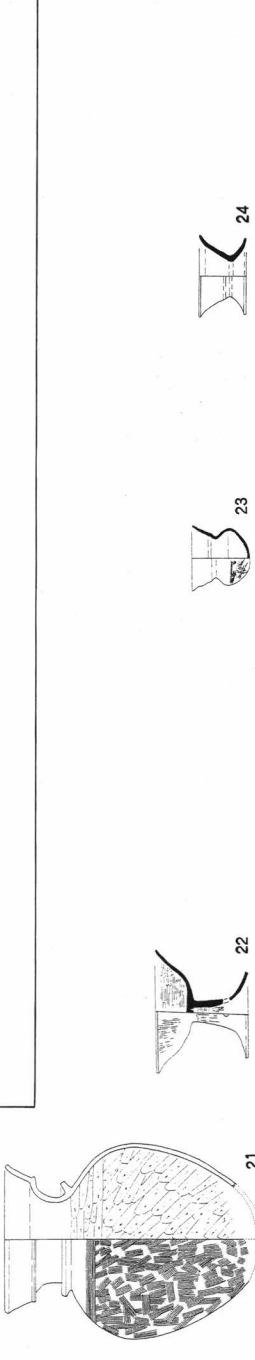
2000年、広瀬和雄はかつて否定した弥生墳墓との継続性について、積極的に評価する立場を表明した。^(注13)またかつて提示した「丹後を単位とする大規模古墳の系列」に相当すると見られる前方後円墳を「大和政権と丹後地域首長層との支配・被支配の関係」(一次的関係)を体现するものとし、方墳を「(一次的関係に)影響を受けつつも、丹後地域の中での首長相互の政治的関係」(二次的関係)を表現していたとした。

2001年杉原和雄は新出の資料や最新の研究を基に、丹後における古墳出現のプロセスについて論じた。^(注14)この中で、初期の古墳に続き、前方後円墳が築かれるという枠組みは変わらないものの、白米山古墳の調査成果を踏まえ、従来から丹後の前方後円墳出現を前期後半に下げる年代観を改め、前期中葉に求めている。また鼓形器台を因伯からの影響としている点も重要である。

3. 資料操作の方法

今回の検討では、これまでの古墳の時期比定を最新の研究成果に照らして見直しを行い、各時期ごとに墳丘規模を長軸で並べる。この段階で墳丘規模の偏りが墳形ごとに見られるかどうかを抽出する。その上で、副葬品の厚薄の段階を設定して規模・墳形との相関を調べる。

時期の決定は主に供献土器を基軸とする。(第1図)庄内式併行期については高野編年による。布留式併行期については、高杯・小型丸底土器の変化を軸に決定している。丹後古墳前期1式としたものは、布留1式と布留2式の古相を一部含むと考えられる。布留式の影響を強く受けているが、定型化していない段階である。高杯には東禅寺1号墳や北谷1号墳など布留1式の畿内から直接搬入されたと考えられるものを含む。これらは器高を口径で割った値に100をかけた径高指数が84~87と、背の高い印象を与えるものである。また杯部内面の底部から口縁部までの高さを杯部内高とし、これを口径で割った値に100をかけた杯部径高指数が30~32と深い印象を与える形状となっている。さらに杯内面底部から裾部までの高さを杯底高とし、これを底径で割った値に100をかけた脚部径高指数が76

丹後古墳前期1式	1 大田南4号墳 2 東洲寺1号墳 3、4、7、8 北谷1号墳 5、6 霧ヶ鼻3号墳 9 <参考>古殿遺跡 10、11、14 神明山古墳 12、18、19 権現山古墳 13、16 左坂B2号墳 15、17、20 明石愛宕山3号墳 21 明石愛宕山9号墳 22~24 大田南6号墳 
丹後古墳前期2式	
丹後古墳前期3式	

第1図 丹後前期古墳供献土器編年表

～82となっている。また外面調整は横方向の細いヘラミガキを特徴とする。こうした特徴を持つ高杯は畿内では東殿塚古墳周濠で出土したものと類似しており、畿内系高杯とすべきものである。一方、北谷1号墳には径高指数69～71、杯部径高指数26～28、脚部径高指数65～72という杯部無稜の背の低い一群がある。こちらは美和32号墳など山陰の布留0式併行～布留1式併行期に見られる高杯に酷似しており、山陰系高杯とすべきものである。この小様式に伴うと見られる小型丸底土器は体部上端の絞りが弱く、幅広な印象を与えるものである。二重口縁壺は頸部と擬口縁部の境界を屈曲させるものが多いが、一部に外反で成形するものがある。また体部はこれ以前の段階には偏球形や球形の体部を持つものが多いが、この段階以降は肩の張る倒卵形が主体的となる。丹後前期2式としたものは典型的な布留2式に併行するものである。高杯は畿内系と山陰系を折衷した器形・調整をとるようになり、径高指数は80～85と背の高い印象はさらに高まる。杯部径高指数は26～32とばらつきが大きくなり、脚部径高指数は66～68の一群と、73～85の一群に別れる。小型丸底土器は体部が極小化し、口縁部が長く伸びる小型丸底鉢と、やや丸みのある小型丸底壺とに分かれる。鼓形器台はくびれ部に突帯が残るものと残らないものが権現山古墳で相伴しており、突帯が残るものは基本的に次小様式には残らない。二重口縁壺は擬口縁部を屈曲させずに外反によって成形するものが主体的となる。丹後古墳前期3式には器高が低くなり始め、径高指数は76前後となる。杯部径高指数は22～29となり、平たく広い印象の杯部となる。脚部の径高指数は前小様式と変わらない。小型丸底土器は小型丸底鉢が供献されなくなり、また短口縁小型丸底壺はまだ登場していない。

また埴輪の編年も必要に応じて取り入れるが、これは佐藤晃一氏の編年^(注15)に、筆者独自の編年観を加味して用いる。特に法王寺古墳の埴輪と温江丸山古墳の「埴輪」について、法王寺古墳の埴輪は従来藤岡出土の初現的な長持形石棺によって新しく位置づけられていたが、藤岡出土の石棺は法王寺古墳とは無関係である(藤岡を初めは法王寺古墳としていた)^(注16)。埴輪そのものはタガの突出度が100を超えるものがあり、特殊器台形埴輪を意識した口縁形状をとるものもある。従って布留2式でも古いものと相伴する可能性が高い。温江丸山古墳に樹立されていたであろうとされる谷垣遺跡出土の埴輪は、いわゆる埴輪ではない。突帯を持つことで埴輪的な特徴を有していることは間違いないが、全体的なプロポーシオン、紋様のデザイン、細長い長方形の透かしといった特徴から、山陰の前期古墳にままだ樹立されることのある円筒形土器と呼ばれるものである。その中でも谷垣例は布留1式併行の大成古墳例や神原神社古墳例よりは後出する要素を持ち、布留2式の塩津山1号墳に近い要素をもつ。神明山古墳の埴輪は表採された高杯と小型丸底鉢から布留2式の新しいところに位置づける。

墳形の決定について、前方後円墳は細分しないが、円墳は正円の円墳と楕円形墳を区別する。これは楕円形墳の被葬者にはある特殊な側面があることが予想されるからである。また方墳も正方形の方墳と長方形墳を一応区別する。また長方形墳の内、尾根に直交する2本の溝によって形成されるものは溝区画型台状墓(系長方形墳)として分離する。また卓上墓・卓状墓系の台状墓である金谷型台状墓と同じ形状をとるものと、溝区画型台状墓(系長方形墳)は伝統的墳形と総称することがある。こうした細分は地域性の析出に必要であると考えられる。^(注17)

副葬品の厚薄については、鏡、鉄製刀剣類、鏃類、農工具とその組合せを比較する。

4. 資料操作の結果

(1) 庄内式併行期最古相～古相

赤坂今井墳丘墓の築造以後の庄内式併行期では、現在までの所赤坂今井墳丘墓に匹敵する墳墓は築かれていないようである。庄内式併行期の前半では長軸27mの楕円形を呈する墳墓の与謝郡加悦町白米山北墳墓が最大で、第1主体部に鉄剣を1振り副葬している。これに続くのが長方形を呈する野田川町内和田5号墓(丘頂型卓状墓；長辺17m)で、中心主体部であるSX01には棺内に鉄刀1振りと棺上に鉄鏃10点が副葬されていた。内和田5号墓ではSX02に鉄剣1振りと鉈2点(配置：1AL-h類^(注18))が副葬されていた。内和田墳墓群では4号墓(卓状墓；長軸8.5m)でも銅鏃2点と鉄剣1振りが副葬されている。このように庄内式併行期前半期においては墳墓の大小によらず、鉄製武器を1点持つという副葬習俗が共有されている。新しい要素は内和田5号墓に見られる長い鉄刀と鉄鏃の多量副葬傾向である。とは言え同一墳墓群内において銅鏃2本組副葬という三たん地域共通の副葬習俗を見ることができ、新たな副葬習俗と弥生時代後期の伝統的な副葬習俗が共存する状況が伺われる。またこの時点では墳墓の大小と副葬品の多寡は中心主体ベースで見た場合、大きな差違を見ることはできない。

(2) 庄内式併行期新相～布留0式併行期

定型化した前方後円墳が出現する直前から出現期のこの時期の丹後では最大規模の26mを測る長方形墳墓の宮津市・舞鶴市三庄太夫・城ヶ腰墳墓、これに次ぐ熊野郡久美浜町天王山A-27号墓(卓状墓系金谷型台状墓；長軸24m)が残存する副葬品を持たない。一方竹野郡弥栄町大田南2号墓(楕円形を呈する墳墓；長軸22m)は、舶載の画文帯神獸鏡と鉄劍、鑿型鉄製品、不明木製品を副葬していた。同じ大田南墳墓群の5号墓(卓状墓系長方形墳墓；長軸約19m)は、青龍3年銘方格規矩四神鏡1面と鉄刀を1振りを副葬していた。中郡(旧丹波郡)大宮町有明8号墓(卓状墓系金谷型台状墓；長軸12m)は、鉄槍1点、鉄剣1

丹後地域前期古墳の規模・墳形に見る階層性と副葬品

墳墓名	所在地	墳形	規模 (m)	鏡	刀剣類	鏃	農工具	その他
白米山北古墳	与謝郡加悦町字後野	橢円形	27		鉄剣1			
内和田5号墳	与謝郡加悦町字明石	台形（丘頂型卓状墓）	17		鉄刀1	鉄鏃10		
内和田2号墳	与謝郡加悦町字明石	長方形	10					
内和田4号墳	与謝郡加悦町字明石	台形（卓状墓）	9		鉄剣1	銅鏃2		
ゲンギョウの山3号墳	竹野郡弥栄町鳥取	長方形（溝区画型）	9				砥石	土師器
三庄太夫・城ヶ腰古墳	宮津市／舞鶴市	長方形	26					
天王山A-27号墳	熊野郡久美浜町字鹿野	方形（金谷型台状墓）	24					
太田南2号墳	竹野郡弥栄町・中郡峰山町	橢円形	22	画文帯神獸鏡	鉄剣1		鑿	不明木製品
大山10号墳	竹野郡丹後町大字大山	橢円形	19		鉄剣1		ヤリガソナ1（1AL-D）、刀子1	
太田南5号墳	竹野郡弥栄町・中郡峰山町	長方形（卓状墓系）	19	青龍3年銘方格規矩鏡	鉄刀			
明石大師山D12号墳	与謝郡加悦町字明石・温江	橢円形	18	—	—	—	—	—
明石大師山B12号墳	与謝郡加悦町字明石・温江	橢円形	17	—	—	—	—	—
川向4号墳	舞鶴市志高川向	長方形（溝区画型）	16					
ゲンギョウの山6号墳	竹野郡弥栄町鳥取	方形（丘頂型卓状墓か）	13		鉄剣1		鉄斧1、ヤリガソナ1（1AL-h）	
有明8号墳	中郡大宮町字三板	長方形（金谷型台状墓）	12		槍1・鉄剣1	鉄鏃21		
左坂G2号墳	中郡大宮町字周枳	方形（金谷型台状墓）	12		鉄剣1	鉄鏃2	鉄斧1	不明鉄製品
屋敷ノ内D2号墳	与謝郡野田川町	長方形（溝区画型）	12		鉄剣1		ヤリガソナ1（1AR-h）	
霧ヶ鼻1号墳	宮津市、与謝郡野田川町	方形	11				ヤリガソナ1（2β-1）	
奈具岡遺跡S2方形周溝墓	竹野郡弥栄町溝谷	方形周溝墓	11	—	—	鉄鏃1*	—	—
屋敷ノ内D3号墳	与謝郡野田川町	長方形（溝区画型）	11					
カジャ遺跡2号方形周溝墓	中郡峰山町字杉谷	長方形周溝墓	11					
左坂G13号墳	中郡大宮町字周枳	長方形（溝区画型）	11				ヤリガソナ1（1AL-h）	
左坂G12号墳	中郡大宮町字周枳	長方形（溝区画型）	10				ヤリガソナ1（1B-h）	
明石大師山B8号墳	与謝郡加悦町字明石・温江	半円形（卓状墓系）	10	—	—	—	—	—
奈具岡遺跡S3方形周溝墓	竹野郡弥栄町溝谷	方形周溝墓	9	—	—	鉄鏃1*	—	—
奈具岡遺跡S1方形周溝墓	竹野郡弥栄町溝谷	方形周溝墓	8	—	—	—	—	—
カジャ遺跡1号方形周溝墓	中郡峰山町字杉谷	方形周溝墓	6					
左坂G4号墳	中郡大宮町字周枳	長方形（卓状墓系）	4					
三板神社裏1号墳	中郡大宮町字三板	不明			鉄剣1			不明鉄器1

第1表 庄内式併行期(上段：最古層・古相、下段：新相～布留式併行期)

振り、鉄鏃21点を副葬していた。同左坂G12号墓も長軸12mの卓状墓系金谷型台状墓であるが、鉄剣1振り、鉄鏃2点、鉄斧1点、不明鉄製品1点を副葬している。竹野郡弥栄町ゲンギョウの山6号墓(丘頂型卓状墓；長軸13m)は、鉄剣1振り、鉄斧1点、鉈1点を副葬していた。墳丘規模と墳形、副葬品の関係は前代とあまり変わらないが、大田南2号墓が橢円形墳墓であり、なおかつ舶載の画文帯神獸鏡を副葬していることが目を引く。また大田南5号墓(卓状墓；長軸19m)でも方格規矩四神鏡を副葬している。長軸で11m以下の墳墓には刀剣類の副葬は見られず、10m未満の墓への副葬は例外的となる。この中で副葬習俗としては鉈の副葬位置がゲンギョウの山6号墓、左坂B17号墓、左坂G13号墓で弥生後期中葉の左坂墳墓群G支群に起源を持ち、金谷1号墓に受け継がれた1AL-h類が踏襲されているとともに、但馬の地域性である2β-1類が宮津市霧ヶ鼻1号墓で見られるなど前代の習俗を踏襲する一方で、左坂G12号墓では1B-h類という新しい配置習俗が出現している。

(3) 丹後古墳前期1式(布留1式～布留2式古相併行)

布留1式の終わり頃から2式の初めにかけて、野田川上流域、かつて白米山北墳墓が築

墳墓名	所在地	墳形	規模 (m)	鏡	刀剣類	鏃	農工具	その他
湧田山1号墳	中郡峰山町	前方後円形	100	—	—	—	—	—
白米山古墳	与謝郡加悦町字後野	前方後円形	92	—	—	—	—	—
法王寺古墳	与謝郡岩滝町	前方後円	74	—	—	—	—	—
北谷1号墳	熊野郡久美浜町字女布	楕円形	40		鉄剣、	鉄製鏃		碧玉製紡錘車形石製品
岩滝丸山古墳	与謝郡岩滝町大字岩滝	円形?	30	神人車馬画像鏡	素環頭大刀1	銅鏃16		
波路古墳	宮津市字波路	楕円形	30		鉄槍2	靱1、鉄鏃12		
明石大師山D11号墳	与謝郡加悦町字明石・温江	楕円形	29	—	—	—	—	—
太田南4号墳	竹野郡弥栄町・中郡峰山町	長方形	26					
島津遠所16号墳	竹野郡網野町島津	長方形	24					
明石大師山A8号墳	与謝郡加悦町字明石・温江	長方形	20	—	—	—	—	—
霧ヶ鼻2号墳	宮津市・与謝郡野田川町	長方形(金谷型台状墓)	20				ヤリガナ1 (1AL-h)	
霧ヶ鼻14号墳	宮津市・与謝郡野田川町	長方形	20				ヤリガナ1	
苗代2号墳	中郡峰山町二箇	長方形	19				ヤリガナ2 (棺上2αB-h, l)	
明石大師山D1号墳	与謝郡加悦町字明石・温江	長方形	18	—	—	—	—	—
左坂B2号墳	中郡大宮町	楕円形	18		剣2		ヤリガナ2 (2B-h・2B-l)、鉄斧2	
霧ヶ鼻5号墳	宮津市・与謝郡野田川町	方形(金谷型台状墓)	18					
東禅寺1号墳	宮津市	楕円形	17			鉄鏃1		
白米山西2号墳	与謝郡加悦町字後野	半円形(卓状墓系)	16					
三板神社裏6号墳	中郡大宮町字三板	楕円形	16		鉄刀1、鉄剣1		方形刃先1	
白米山西1号墳	与謝郡加悦町字後野	方形	15				鉄斧1	
左坂B17号墳	中郡大宮町字周枳	円形(丘頂型卓状墓系)	14				ヤリガナ1 (1AL-h)	
霧ヶ鼻3号墳	宮津市・与謝郡野田川町	半円形(卓状墓系)	11		鉄剣1、鉄鏃7		刀子1、ヤリガナ1 (1AR-h)	
明石大師山B11号墳	与謝郡加悦町字明石・温江	半円形(卓状墓系)	11	—	—	—	—	—
島津遠所17号墳	竹野郡網野町島津	台形(卓状墓系)	10					
ゲンギョウの山4号墳	竹野郡弥栄町鳥取	方形(金谷型台状墓)	8		鉄剣1		ヤリガナ1 (1AR-h)	土師器

第2表 丹後古墳前期1式

かれた丘陵上に全長92mの前方後円墳である白米山古墳が築かれる。ほぼ前後して阿蘇海北岸に全長74mの前方後円墳である法王寺古墳が築かれる。また墳形からの推測になるが、後の丹波郡丹波郷多久神社の背後の丘陵上に湧田山1号墳が築かれる。残念ながらこの3基は副葬品の状況は分かっていない。ただ、最上位階層の墳墓が前方後円墳化し、丹後地域が本格的に前方後円墳体制に参加したことを物語っている。次に規模が大きい墳墓は京丹後市久美浜町の北谷1号墳という長軸40mの楕円形墳である。鉄剣1振り、鉄鏃、石製紡錘車を副葬していた。これに次ぐ規模は長軸30m前後の宮津市波路古墳、与謝郡加悦町明石大師山D11号墳、与謝郡岩滝町岩滝丸山古墳である。これらは前2者が楕円形墳で、後1者は墳丘測量図がないため不詳だが、報告によれば円墳であるらしい。明石大師山D11号墳は上面の調査のみであるため副葬品の状況は不明だが、波路古墳では硬玉製勾玉2点を含む玉類と鉄槍2点、鉄鏃を付けた矢を12本を収めた靱1点が副葬されていた。岩滝丸山古墳には神人車馬画像鏡1面、素環頭鉄刀1振り、銅鏃16点が副葬されていた。

ところがこれに続く規模の竹野郡弥栄町太田南4号墳(長方形; 長軸26m)、竹野郡網野町島津遠所16号墳(長方形; 長軸24m)には副葬品が見られない。一方20m未満の墳墓では鉄剣と鉈を主たる副葬品として墳丘規模に拘わらず副葬品構成は一定している。特に鉄剣

1 振りと鉞 1 点の組合せは長軸8mのゲンギョウの山 4 号墳(卓状墓系金谷型)でさえ副葬しており、この組合せで副葬される鉞は必ず配置が1AR-h類もしくは1AL-h類という三たん地域の伝統を守っている。唯一の例外は中郡(旧丹波郡)大宮町の左坂B 2 号墳であり、これは墳墓形態が楕円形墳であり副葬配置とともに墳形も新しいものへと変化している。

これらを整理すると、墳丘長軸70m以上の最上位階層は前方後円墳を採用し、30~40mの中規模墳は楕円形を採用する。副葬品には銅鏡・刀剣類・鉄鏃・玉類など小規模墳より厚葬の傾向が強い。これに続く20m台の古墳は長方形墳を採用し、副葬品は例外的となる。ところがこれ以下の小規模墳は規模・墳形に関わりなく鉄剣1・鉞1という組合せを主とした弥生時代以来の副葬品目を弥生時代以来の副葬配置を守って副葬するという特徴が見られ、卓状墓系や溝区画型など弥生時代以来の墳墓形態もこの階層に属している。

(4) 丹後古墳前期 2 式(布留 2 式新相併行)

この時期には与謝郡加悦町蛭子山古墳(前方後円墳;145m)、竹野郡網野町網野銚子山古墳(前方後円墳;約200m)、竹野郡丹後町神明山古墳(前方後円墳;約200m)と、いわゆる丹後三大古墳が相前後しながら出揃い、丹後地域の最高首長墓が70~100m級から一気に200m級に格上げになる。前後する時期の佐紀陵山古墳が207m、佐紀石塚山古墳が218mであることと比較すると正に畿内の大王墓級ともいえる巨大さである。与謝郡加悦町蛭子山古墳は副葬品の一部も判明している。内行花文鏡1面、三葉環式鉄刀1振り、鉄刀7振り、鉄剣12振り、鉄槍4点、鉄鏃20点以上、鉄斧4丁が確認されている。この古墳は主体部が以前に荒らされたらしいので、埋葬当初の副葬品は更に豊かであった可能性が高い。これら三大古墳の意義については研究史で紹介した論考に譲り、ここではそれ以下の階層に関して検討する。

3 大古墳に次ぐ古墳は温江丸山古墳(楕円形墳;長軸65m)で、土取り工事によって破壊された際に回収された副葬品として三角縁神獸鏡片と仿製方格規矩獸文鏡、鉄刀1振りがある。三角縁神獸鏡は破片とはいえ、丹後唯一の出土例であり、畿内地域との強い関係が注目される。ところがこの古墳に接した谷垣遺跡で山陰系の円筒形土器が円筒棺に転用されて出土している。佐藤晃一氏はこれを温江丸山古墳に樹立していたと見ており、そうだとすれば、この古墳被葬者は畿内だけでなく、山陰の首長達とも強い関係を持っていたことになる。一方熊野郡久美浜町権現山古墳は一辺50mの方墳であるが、玉類と平縁鏡片のみの副葬であり、供献土器に鼓形器台をもつなど山陰の影響が強い。続く17~30m台の古墳の全てが、熊野郡を除くと正円形の円墳であり、熊野郡の2例は楕円形墳である。また17m級以下には川向3号墳(溝区画型長方形墳;16m)、ゲンギョウの山5号墳(卓状墓系墳;15m)、奈具14号墳(金谷型台状墓系;13m)、作山5号墳(金谷型台状墓系;13m)な

墳墓名	所在地	墳形	規模 (m)	鏡	刀剣類	鏃	農工具	その他
神明山古墳	竹野郡丹後町	前方後円形	210	—	—	—	—	石製品(壺・合子)
網野銚子山古墳	竹野郡網野町	前方後円形	198	—	—	—	—	—
蛭子山古墳	与謝郡加悦町字明石	前方後円形	145	内行花文鏡	三葉環式鉄刀、鉄刀7、鉄剣12、鉄槍4	鉄鏃20以上	鉄斧4	石枕1
温江丸山古墳	与謝郡加悦町字温江	楕円形	65	方格規矩獣文鏡、三角縁神獣鏡片	鉄刀1			
権現山古墳	熊野郡久美浜町大字品田	長方形	50	平縁鏡片				
作山1号墳	与謝郡加悦町字明石・加悦	円形	36	変形四獣鏡1	鉄剣12		刀子4、鉄斧2、直刃鎌2、ヤリノシ1	石剣2
作山2号墳	与謝郡加悦町字明石・加悦	円形	28					
通り1号墳	中郡大宮町口大野	円形	28				刀子1	鼓形器台(転用枕)
明石愛宕山3号墳	与謝郡加悦町明石	円形	27	内行花文鏡1				
通り2号墳	中郡大宮町口大野	円形	20				刀子1(棺内)	歯牙//
堤谷B-5号墳	熊野郡久美浜町字丸山	楕円形(半円)	20				ヤリノシ1(1A-R-D)	鼓形器台(転用枕)
大山9号墳	竹野郡丹後町大字大山	円形	17				ヤリノシ1(1B-h)、刀子1	
北谷5号墳	熊野郡久美浜町字女布	楕円形	17				ヤリノシ(2α-h)	
作山3号墳	与謝郡加悦町字明石・加悦	方形	17					
川向3号墳	舞鶴市志高川向	長方形(溝区画型)	16		鉄刀1		鉄斧1	
三坂神社裏5号墳	中郡大宮町字三坂	三角形	15					
舞鶴切山古墳	舞鶴市伊佐津境谷	長方形?	15?		鉄剣2	銅鏃1、鉄鏃5	ヤリノシ1(布巻き)	
左坂B1号墳	中郡大宮町	楕円形	15		鉄剣1		ヤリノシ1(1A-L-h)	
ゲンギョウの山5号墳	竹野郡弥栄町鳥取	長方形(卓状墓系)	15		鉄剣1			
通り3号墳	中郡大宮町口大野	円形	14					
奈具14号墳	竹野郡弥栄町溝谷奈具岡	方形(金谷型台状墓系)	13					
作山5号墳	与謝郡加悦町字明石・加悦	方形(金谷型台状墓系)	13	内行花文鏡1				石剣3、鉄製品
茶カス9号墳	竹野郡弥栄町吉沢	円形	10					
茶カス10号墳	竹野郡弥栄町吉沢	方形(金谷型台状墓系)	9					
茶カス11号墳	竹野郡弥栄町吉沢	方形周溝墓	6					

第3表 丹後古墳前期2式

ど弥生時代以来の伝統的墳形が含まれている。副葬品については、銅鏡は明石愛宕山3号墳(円墳; 27m)を最小とするが、例外的に作山5号墳(金谷型台状墓系; 13m)にも副葬されている。武器類の内、刀剣類は複数副葬が作山1号墳(円墳; 36m)を最小とする。しかし前述のゲンギョウの山5号墳まで散発的に見られる。刀剣類には分布の偏りが発生し、丹後奥三郡(熊野・竹野・中(旧丹波))にはゲンギョウの山5号墳を例外として刀剣類は副葬されない。農工具の複数副葬は大山9号墳第2主体部(円墳; 17m)を最小とする。そして現状で見る限り10m以下の規模の墳墓には副葬品は見られない。また副葬品全体を見渡して、鼓形器台などを転用枕に用いる墓には副葬品が少ない傾向が読み取れる。

(5) 丹後古墳前期3式(布留3式併行)

この段階に属すると考えられる前方後円墳は多くない。ほぼ確実にこの段階に属すると考えられるのは墳長30mの作山4号墳のみである。熊野郡久美浜町島茶白山古墳や甲山古墳もこの時期である可能性を残すが、積極的な証拠を持たない。黒部銚子山も丹後三大古墳に後続する首長墓と見られているが、手掛かりは墳形のみで、これとても前期後半から中期前半までいずれの可能性もあり、断定できない。従ってこの段階についてはあくまで現状においての検討になるが、最大規模の古墳は中郡(旧丹波郡)峰山町のカジヤ古墳(楕円形墳; 70m)である。丹後の最高首長は前方後円墳を採用することを許されない、または制

丹後地域前期古墳の規模・墳形に見る階層性と副葬品

墳墓名	所在地	墳形	規模 (m)	鏡	刀剣類	鏃	農工具	その他
カジヤ古墳	中郡峰山町字杉谷	楕円形	73	方格変形獣文鏡1	鉄剣3		鉄製鍬先1鉄、製鏃1、ヤリガツ5(2AL-D)、刀子1	筒形銅器1、石釧2、車輪石1、鍬形石2
作山4号墳	与謝郡加悦町字明石・加悦	前方後円形	30					
太田南6号墳	竹野郡弥栄町・中郡峰山町	楕円形	29				刀子12、鉄針、ヤリガツ9(1AR-h)	石釧2
大谷古墳	中郡大宮町大字谷内	円形	28	擬文鏡	鉄剣1		袋状鉄斧1、刀子1	人骨(熟年女性)
明石愛宕山9号墳	与謝郡加悦町明石	楕円形	25		/鉄剣1(棺内)、鉄鏃14(棺外)/		/鏃1、砥石1/	
堤谷B-1号墳	熊野郡久美浜町字丸山	円形	20				刀子1	土器転用枕2(壺)
日ノ内古墳	与謝郡岩滝町字岩滝	方形	20	ボウ製獣形鏡1			刀子、ヤリガツ(2B-h)、鏃	歯牙、不明鉄器
溝谷1号墳	竹野郡弥栄町溝谷	長方形	15					
堤谷B-10号墳	熊野郡久美浜町字丸山	長方形(溝区画型)	12					
ゲンギョウの山7号墳	竹野郡弥栄町鳥取	長方形(溝区画型)	12				/鉄斧1(棺内)、砥石1(南溝付近)	
左坂B13号墳	中郡大宮町	半円形(卓状墓系)	12					
堤谷B-11号墳	熊野郡久美浜町字丸山	長方形(溝区画型)	7					
裾谷A3号墳	中郡大宮町字口大野	長方形(卓状墓系)	6					

第4表 丹後古墳前期3式

限されている状況が読み取れる。一方でカジヤ古墳の副葬品目は、玉類、銅鏡、鉄剣3振り、鉄製鋤・鍬先1点、鉄鏃1点、鈍5点、刀子1、筒形銅器1、石釧2、車輪石1、鍬形石2と畿内的な副葬品目を揃えている。

これに後続する規模の古墳は1例前方後円墳を含むが、基本的に円形または楕円形が20mまで続く。与謝郡岩滝町日ノ内古墳が一辺20mの方墳であり、ここに玉類、刀子、鈍、鏃が副葬されるが、これ以下の古墳には副葬品を持つものは例外的な存在となる。一方、土器転用枕を持つものは副葬品が貧弱である傾向は継続する。また副葬品を持たない階層に、弥生時代以来の伝統的墳形を持つものが含まれている。

5. 考察

以上の結果を踏まえ、丹後地域の首長達がどのように弥生時代社会から古墳時代社会への変化を受け入れていったのかを復元的に考察していきたい。

まず、赤坂今井墳丘墓において周辺埋葬が引き続き行われている最中に丹後の南端、与謝郡加悦町の白米山北墳墓において、畿内側の要請・懐柔・脅迫などを受け入れ、約200年間続いた三たん地域独自の墓制を捨て去り、楕円形墳墓の築造が行われる。供献土器に生駒山西麓産と言われる土器が含まれていることから、主な働きかけの主体者は河内の首長層であった可能性が高い。白米山北墳墓は墳形のみならず供献土器の配置に関する約束事も無視している。とは言え鉄剣を副葬し、供献土器も在地のものが主体を占めることから、被葬者は在地の首長であって、外来者であるとは考えにくい。その他の地域では弥生

時代後期に行われてきた墓制を基本的には引き継ぎ、畿内側からの交渉は限定的であったと考えられる。梅林寺銅鐸などはこの過程で丹後にもたらされた可能性が高い。

庄内式併行期も新相にさしかかると、畿内側からの交渉は奥丹後へも及び、大田南2・5号墳への舶載鏡副葬という現象を生み出す。また大田南2号墳は楕円形墳であり、奥丹後への畿内勢力側の首長を誕生させることに成功している。これとともに丹後地域内での墓制、特に墳形における統制・約束事が弱まり、方形周溝墓制の再侵入を許すことになる。しかし丹後にはまだ三庄太夫・城ヶ腰古墳、天王山A-27号墳など旧来の伝統を墨守する首長が上位におり、畿内側からの丹後攻略は成功を収めたとは言い難い状況にある。またこの時期、兵庫丹波の内場山墳丘墓、山代の田辺城下層墓など逆に三たん地域の墓制が南下する傾向が見られる。さらに丹後の海岸部には山陰からの移住者が殺到しており、畿内地域からの影響は微々たるものにとどまっている。

丹後古墳前期1式では様相は一変する。前節でも述べたように、70～100m級の前方後円墳が各流域最高首長墓に採用される時期である。より詳細に見ると、布留1式併行期の段階にはまず白米山北墳墓の隣に白米山古墳が築造される。さらに加悦谷での勢力拡大を狙って明石大師山D11号墳(楕円形墳；29m)が築かれる。また河口部の掌握を目指し、阿蘇海沿岸で伝統的な墓制を守る霧が鼻古墳群を避ける形で東禅寺1号墳(楕円形墳；17m)や、宮津湾に面した波路古墳(楕円形墳；30m)が築造される。さらに奥丹後の最奥部、熊野郡に北谷1号墳(楕円形墳；40m)が築造され、佐野谷川流域まで畿内側からの首長権掌握工作が行われている。首長権の掌握が完了した地域には大田南4号墳や明石大師山A8号墳のような20m台の長方形墳が築造され、楕円形墳－長方形墳という前方後円墳体制に倣った階層構造が形成される。一方で白米山古墳に随伴する白米山西2号墳(卓状墓；16m)では弥生時代以来の墳形を保っている。布留0式併行期まで伝統的墳形を保ってきた左坂墳墓群でも楕円形墳の採用が相次ぐ。そして布留1式～2式へ移行する時期になると中郡(旧丹波郡)に湧田山1号墳(前方後円墳；100m)、阿蘇海北岸に法王寺古墳(前方後円墳；74m)が築造され、竹野川流域(中郡・竹野郡東部)は前者に、野田川流域(与謝郡)の海岸部は後者に統括されると見られる。これらの下位には20～30m級の楕円形墳・円墳と20m以下の長方形墳・方墳が築造され、墳形と規模がほぼ整合的に階層構造を表出するようになり、副葬品も原則これに倣うようになる。一方で20m以下の墳丘規模には伝統的墳形が残存し、副葬習俗もこうした新たな階層構造の影響を受けずに存続する。埋葬施設に関しては、左坂B2号墳で丹後の弥生時代首長層が共有した舟底状木棺を採用する一方で、与謝郡の古墳が軒並み割竹形木棺を採用するなど、伝統の残存と革新が水戸谷峠を境にせめぎ合う状況が見られるが、これ以降、中心主体に採用されることは稀となり、舟底状木

棺は首長の木棺としての地位を失い、副次的被葬者の木棺へと変化する。

丹後古墳前期2式は更に劇的な変化を見せる。三大古墳の登場もさることながら、60m級の楕円形墳が野田川流域に中間層として登場し、17m以上の古墳が熊野郡を除き、ほぼ全て正円形に統一される。副葬品に関しては刀剣類の副葬が与謝・加佐郡に限定され、複数副葬はほぼ30m台以上に制限される。鏡の副葬が20m台後半以上の古墳に限定される。伝統的墳形は17m以下の墳墓に含まれるが、鉈を副葬しなくなる。とはいえ副葬品が全く見られなくなるのは10m以下であり、伝統的墳形を保持するものは副葬習俗に拘泥する状況が見られる。全体を通して副葬品の厚薄は墳形・規模に対応し、不相応な程副葬品が少ないものには土器転用枕が置かれ、山陰とのつながりを表象している。熊野郡に関しては川上谷川流域に権現山古墳(長方形;50m)が築かれるが、これは山陰の首長層との結びつきが強く、川上谷川流域に楕円形墳が築造されないことと相俟って畿内政権とは一定対峙的な関係を構築していると見られる。

布留3式には楕円形墳が流域最高首長及び盆地最高首長の古墳となり、20m以上が円墳、15~20mが方墳・長方形墳、これ以下が伝統的墳形となる。熊野郡の堤谷古墳群で見ると、伝統的墳形が円墳と同一古墳群に築かれており、円墳-伝統的墳形という階層構造が明確化している。これは副葬品にも現れており、伝統的墳形には基本的に副葬品は入っていない。なお、川上谷川流域の前方後円墳はおそらくこの次の段階に川上谷川の東岸に築かれ、これをもって丹後地域の首長権の掌握は完了したものと見られる。

6. 丹後地域と前方後円墳体制-結語に変えて-

前節まで、丹後地域の各地・各階層の首長達が畿内政権や山陰地域との関係をどのように墳墓に表してきたかを見てきた。その中でのキーワードは「楕円形墳」と「伝統的墳形」である。前者は畿内政権の支配または影響下に置かれ、そして隣接する地域を取り込むことを使命とされた首長の墳墓であり、後者は前者とは初めは対峙的に、そして後には支配を受ける立場として存続し続ける。対峙から被支配への転換点は与謝郡では布留1式併行期に、奥3郡の内丹波・竹野郡は布留1式併行期から2式へと移り変わっていく時期に求められる。熊野郡は更に遅れて布留3式から丹後中期1式頃と見られる。ただし、最初に畿内政権から直接・間接に把握された首長層は墳丘長が20mを超える墳墓を構築する盆地・港湾最高首長とその側近または直近の血族までであって、18m以下の集落首長層は一部の戦略拠点以外は把握の範囲外であった可能性が高い。この階層まで畿内政権からの規制が及ぶのは丹後古墳前期2式であるが、主に副葬品に対する規制であり、墳形についてはやはり規制の対象外であったらしい。副葬品への規制は丹後古墳前期3式にほぼ貫徹さ

れ、集落首長層へも墳形の規制は行われるが、集落首長層より下位の階層の墳形についてはなお規制対象外であった。

また視点を変えると、熊野郡を中心に見られる山陰地域からの影響を丹後古墳前期3式に到ってもなお払拭できずにいる状況が見られる。これは畿内政権の丹後地域における安定的な領域支配に深刻な脅威をもたらすものであり、特に盆地最高首長として政権内に組み込んだはずの通り1号墳や山陰地域攻略の最前線である佐野谷川上流域最高首長の堤谷B-5号墳が鼓形器台を転用枕として用いている状況は、面従背腹の盆地首長を抱えているに等しい。熊野郡域の支配確立が遅れたのは、いわゆる布留0式併行期から続く、山陰側からの継続的な丹後各地の首長達への働きかけがあったからに他ならない。熊野郡へいち早く築かれた北谷1号墳の供献土器に山陰系高杯が5個体以上持ち込まれており、その後も古殿遺跡や権現山古墳でも出土している。また丹後在地の土師器高杯は畿内系高杯と山陰系高杯の折衷的な形状を呈しており、集落内においても山陰の影響が強く及んでいることが伺われる。鼓形器台も神明山古墳や網野銚子山古墳の造営に関わった大將軍遺跡で出土しているほか、丹後各地の古墳から供献土器や転用枕として出土している。丹後の各地で散見される箱式石棺なども山陰の影響を伺わせる。こうした状況は5世紀初頭頃まで続くとみられる。

丹後地域における前方後円墳体制は楕円形墳に埋葬される首長を使って丹後地域内を地ならしした上で、丹後古墳前期1式には70~100m級の前方後円墳を主要河川流域最高首長に取り入れさせ、これを頂点とした盆地・港湾最高首長(30~40m台の楕円形墳)、とその側近または直近の血族(20m台半ば以上の長方形墳)という階層構造を受け入れさせることで始まった。さらに三大古墳の時期には与謝郡(野田川流域)では蛭子山古墳-温江丸山古墳-作山1号墳-明石愛宕山3号墳-作山5号墳という精緻な階層構造が形成されている。竹野・中郡では河口部を流域最高首長を兼ねた広域首長が押さえ、これらが盆地最高首長である通り1号墳(円墳; 28m)や集落首長である大山9号墳(円墳; 17m)を直接従え、この下位に伝統的墳形の被葬者が組み込まれる。しかしとりわけ墳形については畿内側から掌握された階層より下位の人物の墓については、特段の規制があった可能性は低い。畿内政権にとってこれらの階層の人々は掌握すべき埒外の人々とされていた可能性がある。副葬品に関する規制は広瀬和雄が指摘するように、より上位の盆地最高首長や集落首長から受けた二次的な規制である可能性もあり、集落首長の血族や、有力家族が独立した墳墓を造営しているということは畿内政権の想定外であった可能性すら考えられる。

古墳時代前期において日本列島の広い範囲に前方後円墳が築造され、都出比呂志氏の前方後円墳体制が社会の隅々まで行き渡り、「古墳時代に入った後の墳墓は全て古墳と呼ぶ

べきである」という論調が無批判に受け入れられている現状は、一旦個々の遺跡に戻って再検討すべきなのではないだろうか。よく話題に上る「古墳時代の方形周溝墓」という表現も、方形周溝墓が弥生社会からの延長で採用されており、副葬品や内部主体、供献土器の構成や配置法などに弥生時代からの伝統が認められ、上位階層の墳墓と異質的な状況が認められるのであれば、古墳時代に入っているにも拘わらず、弥生時代以来の墓制が畿内政権の把握を受けずに存続している可能性はあり得ると考える。古墳時代における地域史の研究深化にはこうした視点が不可欠ではないかと提唱して結びとしたい。

補記 楕円形墳の特異性に初めに気づいたのは加悦町教育委員会の加藤晴彦氏であり、本稿は数年来収集していた丹後の前期古墳の資料をまとめるにあたり、加藤氏の問いかけに応えるものである。なお、各古墳の報告書及び出典については紙幅の関係上割愛させていただいた。

(ふくしま・たかゆき＝当センター調査第2課調査員)

- 注1 福島孝行「いわゆる丹後地域方形台状墓概念の再検討」『弥生時代の墳墓と祭祀』（第11回京都府埋蔵文化財研究集会－発表資料集－ 京都府埋蔵文化財研究会）2003
- 注2 都出比呂志「日本古代の国家の形成過程－前方後円墳体制の提唱－」（『日本史研究』338 日本史研究会）1990
- 注3 田中彩太・広瀬和雄ほか『同志社考古』10号記念特集 丹後の古式古墳 1973
- 注4 堤圭三郎「京都府北部の古墳概観」（『京都府埋蔵文化財論集』第1集 （財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）1987
- 注5 平良泰久「方墳二態」（『京都府埋蔵文化財論集』第1集 （財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）1987
- 注6 細川修平「丹後・加悦谷における古墳の変遷」（『考古学研究』第34巻第1号 考古学研究会）1987
- 注7 細川康晴・森 正・杉原和雄「京都府の円墳」（『古代学研究』第123号 古代学研究会）1990
- 注8 杉原和雄「丹後地域にみる布留式甕と前期古墳の分布について」（『京都府埋蔵文化財論集』第2集 （財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）1991
- 注9 杉原和雄「考古学からみた丹後の前半期古墳時代」第1回加悦町古墳シンポジウム 1992年11月29日（『第1回加悦町古墳シンポジウム 蛭子山古墳の時代－日本海側における巨大古墳の成立－』（加悦町教育委員会）1993に収録）
- 注10 細川康晴「丹後における前方後円墳の出現」両丹・但馬考古学研究会交流十年研究大会 1992年12月5日（『前方後円墳の出現をめぐって』（両丹考古学研究会）1994に収録）
- 注11 第3回加悦町文化財シンポジウム1996年3月10日（『第3回加悦町文化財シンポジウム 徹底検証 日本海三大古墳がなぜ丹後につくられたのか その謎に迫る』（加悦町・加悦町教育委

員会) 1997に収録)

岸本直文「三大古墳の古墳築造企画」、和田晴吾「三大古墳と日本海沿岸の古墳」、高橋克壽「三大古墳と埴輪」、広瀬和雄「三大古墳と大王墓」

注12 細川康晴「鏡出土古墳の基礎的検討」第17回両丹考古学研究会・但馬考古学研究会交流会 1999年11月28日(『太邇波考古』第14号(両丹考古学研究会) 2000に収録)

注13 広瀬和雄「丹後の巨大古墳」(季刊考古学・別冊10『丹後の弥生王墓と巨大古墳』 雄山閣) 2000

注14 杉原和雄「丹後地域の古墳の出現と展開－青龍三年銘鏡から見た畿内とその周辺－」(『北近畿の考古学』(両丹考古学研究会・但馬考古学研究会) 2001

注15 佐藤晃一「近畿北部の埴輪」第2回加悦町文化財シンポジウム1994年3月6日(『第2回加悦町文化財シンポジウム はにわの成立と展開－日本各地におけるはにわの導入と展開－』(加悦町・加悦町教育委員会)1994 に収録)

注16 梅原末治「男山法王寺ノ古墳」(『京都府史蹟勝地調査会報告 第五冊』)1925

注17 前掲注(1)

注18 福島孝行「弥生墳墓における鉢副葬作法(1)－丹後地域－」(『京都府埋蔵文化財情報』第78号)2000